

教 仁 名 聞

第 88 号
 (発行日)
 2018年1月1日
 発行所：真宗大谷派念佛寺
 〒 6638113 西宮市
 甲子園口2丁目7-20
 電話・FAX (0798)
63-4488
 (発行人) 土井紀明
 mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
 http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》
 ○ 〈同朋の会〉
 毎月22日 午後2時始。
 ○ 〈念仏座談会〉
 毎月2日と12日 午後3時始
 ○ 〈聖典学習会〉
 毎月6日 午後7時始。
 ○ 〈真宗入門講座〉
 毎月18日 午後6時30分始。
 * 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

人生は何処への旅か

「元旦や 冥途の旅の 一里塚 めでたくもあり めでたくもなし」という歌があります。冥途といは迷いの闇き境界(地獄・餓鬼・畜生あるいは修羅や人間界などの苦しみの世界)ということ、そこへの道中の一里塚ということでしょう。何とも皮肉った歌ですが、イヤとはいわれない真実があります。

「一日生きるということとは(死ぬまでの日数が一日一日減ってくる)というマイナス思考はやめて、私が今日、朝、目が覚めたことはさらに(一日を頂いたこと)で有難いことだ」というプラス思考で生きよう」というような話です。これもそれなりの意味があると思います。

ただ、どちらの考えも必ず来たるべき死に対して真正面に受け取っていないです。死して後どうなるのかという事は問われていません。思考の俎上にもものぼっていません。ですからこのような「プラス思考」というものも納得いくようですが、なお落ち着かないものです。というのはやはり自分の死そのものの問題をなお避けているからではないでしょうか。

冥途は地獄・餓鬼・畜生などで、冥途の旅とは、死して行く先が「真つ暗」ということとであり、あるいは死して「虚無に入り込む」ともいえましよう。こういう感じは現代人にもあります。そういう意味で人は「死」という不気味で不可解な闇に直面しているのであり、ほどなく直面するといえましよう。

必ずやってくる死とまともに向き合わず日暮をして、年々歳を重ね、やがてチラチラ自分の死を考えるようになって

このような私たちが浄土の教えを聞き、お念仏を申すようになって、「称えているその南無阿彌陀仏は阿彌陀仏があなたを浄土に必ず生まれさせる」とお誓いになっているお言葉です。この言葉をその通りに受け入れるのです。だから、自分は死んだら終わりだとか、死んだら真つ暗闇に落ちるのだとか、虚無に入るなどと考える必要はありません。阿彌陀仏の広大な大慈大悲のお誓いによって(浄土に必ず生まれさせる)との仏のお言葉を受け入れるだけでいいのです」と善知識からお聞かせいただくのです。こうして「冥途の旅の一里塚」ならぬ「浄土の旅の一里塚」それが元旦の意味になるといえましよう。

ただしかし、ここからが真宗の聞法で大事なところなのです。教えをお聞きすると「冥途にいくと思うことはいらない、浄土に生まれるといいた

「自分のお言葉がまことだと頂いて、仏の仰せに順うばかりです」と聞かせて頂く。そして「自分の考えや思いなんて置いて、ただ仏のお言葉を受け入れるだけだ」と、決着をつけようとするのです。こうして、そのように受け取るのですが、「浄土に生まれさせる」という南無阿彌陀仏の仰せを善知識から聞いても、それがまだ「浄土に生まれさせて下さる」という教義を知識として受け取っているのだから、本当に南無阿彌陀仏の「浄土に連れて行く」という大悲の仰せが信受されていない、浄土に生まれるとい

謹賀新年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

土井紀明 中村穂積
 土井眞由美 宮野勲
 中川政二 吉田徳子

平成三十年元旦

三塗苦難ながくとじ

(和讃問答)

ない場合が多いのです。自分の聞いて憶えた教義として「この南無阿弥陀仏様が浄土に生まれさせて下さる」と、知識として受け取っているだけで、真実に信受されていないのです。

ここに教義上の知的な了解や記憶と、真実信心との違いの間に溝があるのです。この溝が一通りの聞法で済まない点が聞法上の課題となるのであります。

ところが念仏しながら聞き聞きしていると、私の考えや思いは全く助かる縁にも手がかりにもならないことが身にしみて感ぜられ、いよいよ「阿弥陀様ばかり」ということが知らされてまいります。

そこにはからずも今ここで阿弥陀仏の大悲のお心にふれ「汝を浄土に生まれさせる」という思召しが「ああ有難い」と自ずからホントといただけなのです。

そしてたとえ「ホントだろうか」という疑問が起こっても、「そんな自分の思いにまったく用がない」となって相手にしなくなるのです。阿弥陀仏の仰せが真実であり、「仏語に虚妄なし」と知らされるの

です。これが「信受された」ということで、これは壊れませんが、せんし無くなりません。不思議です。

ですから今ここで阿弥陀仏の大慈悲心にふれるということ、阿弥陀仏の撰取して捨てないという働きにであうということ、そのことよって「汝を浄土に連れて行く」という阿弥陀仏の仰せがまことといただけるのです。

ただ浄土がどういう素晴らしい領域であるかは凡夫の私たちには分かりませんから、「生まれさせる」とお聞きしても喜びが少ないのは仕方がないことだと思えます。

浄土がどれほど尊い功德に満ちた領域であるかは浄土に生まれて始めて十分に知れるのでしよう。もちろん人様によつては大変喜ばれるお方がありましようが、細々としか喜べないのは己の煩惱の深さや愚かさのゆえです。

こうして南無阿弥陀仏を称え、南無阿弥陀仏を聞くところに、人生の旅を「冥途の旅」とか「虚無に消えていく」などと思う必要が無く、「浄土への旅」であるという一筋の道が与えられてきます。(了)

三塗苦難ながくとじ
但有自然快樂音

このゆえ安樂となづけたり
無極尊を帰命せよ

(浄土和讃)

現代語意識(浄土には三塗の苦難の名さえも永く聞かず、宝池の水にもただ自然快樂の音を聞くのみである。それ故に浄土を安樂と名づけたのである。安樂の主たる無極尊の弥陀をたのめ)

* * *

N 「三塗苦難ながくとじ」の三塗というのは」

D 「三塗は地獄・餓鬼・畜生という三悪道のこと、苦しみ境界です」

N 「苦難は」

D 「苦しみ難儀をすることで、〈三塗苦難〉で、三悪道だけ

でなしに人間界などを含めて、苦しみ難儀をする境界、それらの境界にもはや永劫戻ることのない、そういうお徳の成就しているのが浄土だと讃え

られているのです」

N 「お浄土では苦難が永遠に閉じられる、といわれるお言葉が有難いですね。この人生だけを考えてみても、大なり小なり苦難の連続とも言えます。そういう苦難の人生において念仏にあわせていただいて阿弥陀仏と共なる生活をさせて頂くのは有難いです」

D 「そうですね。苦難の多くは、〈身をもっている〉ことから来るように思います。この身の保全のために、どれほど難儀なことに耐えねばならないか。また食べるためにどれほど他の生き物を殺して食べってきたか。暑い寒いから身を守り、衣料と住居のことに思い煩わねばならない。病いにならないように始終気をつけ、病気になれば身体の苦痛に耐えていかねばなりません」

N 「流転の身を受けると苦難の生をまぬがれないですね。では次に〈但有自然快樂音〉とは」

D 「浄土は大経に〈ただ自然

快樂音あり」といわれるのです。自然とは、こちらから計らわずともおのずからという意味です。快樂音の音は〈こえ〉と読まれていて、仏法の声、真理の声、覚

りの声が自ずと聞こえ、その声は安らかな涅槃の安らぎに満ちた音であり、聞く者に清浄なる安樂を与えて下さるのであります。安樂なる音であり、声であり、響きを聞かせて頂くのであって、嘆き悲しみ憂いの声は浄土には一切無いのであります。有難いですね」

N 「自然快樂音という場合の快樂は、いわゆる私たちのいう快樂とは違うのですね」

D 「ええ、浄土の場合の快樂は〈けらく〉と読み、浄土の安樂、極樂、覺りの樂で、私たちのいう快樂とは違います。私たちの快樂はすぐ苦に変わってしまいますし、浄らかな喜悅ではありません。

龍樹菩薩の偈に

たとへば疥者の、猛焰に近づきて、初めはしばらく悦ぶといへども、後には苦を増すがごとし。食欲の想もまたしかなり。始め樂着すといへども、つひには患ひ多し。

信心夜話

(疥はハタケ)

とあります。この意味は、ハタケを患っている皮膚病の者が熱い火に近づくと、初めの

うちは掻いて気持ちがいいが、しばらく掻いていると血が出てかえって苦痛になる。そのようにこの世の快樂は、初めのうちは楽しいが、それが返

って苦しみに変わってしまう、と言われるのです。こういう事を私たちは今まで何度も経験したでしょう。この世の楽しみは慣れればなんともなくなり、度が過ぎると苦しみに変わります。それに反して浄土の樂は壞れることのない、

この世の苦樂を越えた真実の清浄な安樂といわれています」

N 「おいしいからといって食べ過ぎると後で苦しくなり、飲み過ぎると苦痛になりますね。最近ではネット中毒というのがあるって、ネットやゲームが楽しいからといってそれにはまり込むと仕事ができなくなりお金も使い、本人も家族も困ることになります。この世の楽しみは何ごとともほどほどがいいのですが、欲望が抑えきれずに後で後悔する

ことが多いです」

D 「この世の中で真実の樂はありませんね。この世に色々な楽しみがありますが、どれ

も一時的であり、変わりやすく、返って煩いになることが多いです。真実の樂は仏法の樂ですね」

N 「仏法の樂がまさに成就しているのが浄土だということがこのご和讃でも伺われますが、この世でも仏法の樂はあるのでしょうか」

D 「当然あります。南無阿彌陀仏を称え聞くとともに、阿彌陀仏の大悲のお心が私の心に届いて、苦しみ悩みの人生に安らぎが与えてきます。もちろんお浄土ほどの安樂ではないでしょうが」

N 「苦難の多い人生に南無阿彌陀仏が働いて下さるので

ね」

D 「ええそうです。松並松五郎さんの歌に

苦しみ悩みの奥底に
縁なき魂に湧く水は
口に聞こえる南無阿彌陀仏
とあります」

N 「苦しみ悩みの奥底に」とは

D 「苦しみ悩みの身であり苦難の人生である、その根底に阿彌陀仏は私と共にいて下さるので

です」

たず、流転を重ねてきた我が身であり我が魂ということですね」

N 「湧く水は」とは

D 「そんな私たちにともにいて下さる阿彌陀仏が出離の縁のない魂に大悲の水を注ぎ沸き上がって下さるのです」

N 「口に聞こえる南無阿彌陀仏」とは

D 「阿彌陀仏は、南無阿彌陀仏と口に現れ、南無阿彌陀仏と耳に聞かして下さいます」

N 「耳に聞こえる南無阿彌陀仏はどう聞かされるのですか」

D 「汝を助ける、ここにいます」と

N 「では次にへこのゆえ安樂となづけたり 無極尊を帰命せよ」とは

D 「そういうわけで浄土を安樂世界とか安樂国とか極樂とか名づけられるのです。そのような浄土に阿彌陀仏の大悲のお力ばかりで連れて行って下さる。そういう極まりなき功德のまします尊き阿彌陀如来様に帰命したてまつれ、とのお勧めです」

(了)

信心夜話

A 「私のような者がこの世でアミダ様にあうことができるのでしょうか。真実信心を得ることができるのでしょうか」

D 「明日死ぬか分からない私、明日すらどうなるか分からない私が、将来アミダ様にあうことができるかどうか、あるいは信心を頂くことができるかどうかなど、予測することも決めることもできません。そんな力は到底私たちにはありません」

A 「そうすると私の方からはアミダ様にあうなどということとは全く手の及ばないことなのですね」

D 「ええそうです」

A 「でしたらもう私はダメなのかも知れませんね」

D 「私たちからはアミダ様にあう能力もなく予測もまったくできません。どこに真実があるのか、またどうしてあえるのか、右も左も分からない愚鈍の身であり、ただ転がっているに過ぎない者です」

A 「ではどうしようもないのでしょうか」

アミダ様の方から私に今ここに実はいかに来て下さっているのです。あなたが偉いからでも賢いからでも善人であるからでもありません。無能無力の罪深い身であるにもかかわらず、です」

A 「どこに来て下さっているのですか」

D 「南無阿彌陀仏と称えてみなさい。そうすると知られませ」

A 「ナムアミダブツ、ナムアミダブツ」

D 「称えようとナムアミダブツと聞こえるでしょう。南無阿彌陀仏の一声は、アミダ様が私たちの所に既に来て私を抱いて下さっている姿であり証拠です。私と離れないお働きとして私とともにいて下さるのです」

A 「そうお聞かせ頂いても私には分かりません」

D 「私の頭で考えても思案しても分かりません。だからお釈迦様は(念仏申すべし)とお勧め下さるのです。今あなたはナムアミダブツと称えたでしょう」

A 「はい。ナムアミダブツ、ナムアミダブツ」

D 「そうするとナムアミダブツと耳に聞こえるでしょう」

A 「ええ」

お便り

T・S氏からの便り

(T・Sさんの所感『木村無相師臨終法話注記』からの十月号よりの続きです。)

* * *

○われらの「ナントモナイ機」、まるきり出離については「ダメな機」「アカン機」は凡夫の機ではわからず、お念仏に含まれている真実信心ナムアミダブツによって思い知らされたのであるから、「ナントモナイ機」と「マルキリダメな機」、「アカン機」と如来の信心、

念仏とは離れていない、如来回向の念仏に含まれている信心によって「ナントモナイ機」と思い知らされたのであるから「ナントモナイ機」と思い知らされたらそのうえに別に信心とか念仏とか持つてこな

くて、ただ「ナントモナイ」心を思い知らされただけでいいのである。(無相)

☆私思う。自己では自己のダメな機やアカン機、何ともない機を知ることではできません。自己の宿業を自覚することは本当はできないと真実に知る

ことが宿業の自覚というものです。自己の宿業が徹底して無能な機であると知らされる

ことが宿業の自覚、悲しみというもののなのです。人間の頭で考えてわかるものは自覚でも悲しみでもありません。念仏に照らされて初めて弥陀の深い願心に涙するとき、深く自己を懺悔するとき自ずから絶対無能の自己を知らしめられるのです。「ナントモナイ機」の悲しみこそが弥陀の本願相応の正客であったのかと。弥陀の回向の願心は南無阿弥陀仏様です。

「我に信心あるうがなからうが、みなそらごとたわごと、我が機は死ぬまで迷うゆえ、弥陀は我が機の親となり、弥陀の願心我が安心、ただ南無阿弥陀仏と仰ぐばかり」

○法信⑩続き
アカン機(ナントモナイ機)

をアカン機と知らされたのも法から知らされたのじゃ。だから、「アカン機一つ」(ナントモナイ一つ)が思い知らされたら、その場へオヤ(如来)を出さずとも、アカン機ぞよと知らされた一つの中にアカン機もマカセル法も一つに二つが満足している。

そうであってこそ「本願相応のお念仏」であり、われわれ凡愚としてはこれよりほかに歩みようがないのです。そういう生き方を「ただ念仏」という。(無相)

☆私思う。「本願相応のお念仏」が絶対無能の私だと信知して下されればその中に弥陀の願心南無阿弥陀仏があるのでからそのうえに親の恩を持ち出さなくてもよいと。助かないままに助けられている不思議なる生き方を「ただ念仏」というのです。ここに初めて私のための念仏とただかれるのであります。本願相応のわが機のための本願相応の念仏なのです。絶対無能の宿業の自覚なぞ決してできないと自覚されたところが本願念仏のいただきどころなのです。絶対無能の私といたただけたところが弥陀の願心の届きどころなのです。「本願相応の機と本願相応の念仏」ただこれだけでよいのです。ここまでわからして下さるお方、無相菩薩さまとしか言いようがありません。ナムアミダブツ (次号に続く)

も、全く私の方からはつかまされたまわらないのです。今私の背後に私と共にいてくださるアミダ仏は私のハカライでは知れないのです」

A「どうしたら知れますか」

D「どうしたらという、そういう、私たちからアミダ仏に掛けることのできる橋はありません。ただ、お念仏を称え、お念仏を聞きつつ、今申し上げたこの口から出て下さる南無阿弥陀仏のお心をよくよく聞かせていただくほかにはありません。称える南無阿弥陀仏様の大悲心が不思議にも私の心に届いて下さって、(ああ、アミダ様は私とともにいて下さる)と、アミダ様のお働きによって知らされるのです」 (了)

〈遠方法話予定〉

三月三日。福井別院。二組門徒研修会。

十時より十二時半。法話・座談。

三月七日。名古屋市。高畑開法会館。

十時より十二時半。法話・座談。

三月十日。石川県小松市。興宗寺婦人会。一時半始。

三月十七日。姫路市。西源寺。一時始。

五月九日。名古屋市。高畑開法会館。

十時より十二時半。法話・座談。

D「その一声一声のナムアミダブツは、阿弥陀様が(我汝とともにいる。汝を抱いている、引き受ける)と喚んで下さるお声なのです」

A「耳に聞こえるナムアミダブツは、アミダ様が(ここに汝とともにいる)と知らせて下さるお声なのですか」

D「ええそうです。私がアミダ様にあおうとする前にすでにアミダ様の方から私に会いにきて下さっている、そのお姿がナムアミダブツの声となって下さっているのです」

A「ナムアミダブツと称えませんが、このお念仏が阿弥陀様のまします証拠でありお姿なのですね。」

D「ええそうです」

A「この事が、なかなか分かりません」

D「あなたが分かりにかかる前にすでに今ここに来て下さっているのです」

A「そこが分かりません」

D「この事は何の準備も訓練もいらぬ。いつでも今知られるようになっていくのです」

A「それが分からないのです」

D「アミダ仏を知る力の無い、全く無知無能な私たちですが、まだ自分の方から知りにかかり、分かりにかかり、つかみにかかろうとします。けれど